

# 無学なただの人ペテロ

田 中 左 右 吉

(上)

は し が き

『人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時にふたりの無学な、ただの人たちであることを知って不思議に思った。』(使徒行伝第四章十三節)

これは、エルサレムにおけるイエスの弟子たちの活動がペンテコステの聖霊降臨以後急激に活潑となり宗教大衆運動として旺盛になってゆくを見て、市内の治安維持を託されていた「議會」の議員たちがそのなりゆきを憂慮して、その指導者格と見える使徒たちを捕え、議會の審判にかけた時の光景を描いた一節である。

ここでペテロはヨハネと共に議員たちには『無学な、ただの人たちである』(ἀδύνατοι ἐν παιδείᾳ καὶ ἐν νόμῳ)と認定されている。このことは、当時の社会における指導階層の人々からは彼が宗教的に無知であり無頓着な寧ろ非宗教的な人間であると思われていたことを語るものである。パリサイ派の人々、律法学者たち、サドカイ派の人々、祭司たちは、所謂モーセの律法をはじめ成文化された律法や、その解釈適用についての「いいつたえ」として口伝された宗教的律法に精通することを以て敬虔な信仰人、神に嘉せられる者と考えていたので、成文律法、口伝律法を問わず、律法に無知であり、その遵守に無頓着であるものは、之を *am ha-aretz* 或いは *ammè ha-aretz* と呼んで、正統的ユダヤ教一般人からは、卑しめられ馬鹿にされ、除け者扱いにされていたのである。

ガリラヤの大衆は概ねユダヤ地域にいる者に比して正統的ユダヤ教信仰者からは非宗教なものとしていた。ナタ

ナエルが『ナザレから、なんのよいものが出ようか』（ヨハネ福音書一四六）といったのも、『この人はガリラヤのナザレから出た予言者イエスである』（マタイ福音書二二二）とエルサレム市民が驚いたのも、そうした通念があったからである。ペテロの言葉使いが田舎者臭く荒々しくガリラヤ的特色のあったところにも、斯うした蔑視を深めしめるものがあつた訳である。

いずれにせよ、ユダヤ教の立場——ユダヤ教信仰を基準としての判断——では、ペテロは宗教人としては門外漢であり、宗教について無知な者、宗教に無頓着な生活をしている者としてしか認められなかつたのである。だが、実際には驚くべき宗教大衆運動の中心人物であり、その指導者であつたのである。それだから、議会はペテロらを捕え、その審判に問うということになつたのである。

議会人としては、ただ『不思議に思う』よりほかにすべはなかつた訳である。

## 一

ペテロの生立ちについては、これを詳かにすることができないが、ヨハネによる福音書（一四四、一二二）によれば彼はベツサイダの生れであつた。ベツサイダはガリラヤ湖の北岸で東寄りのところにあり、デカポリス地方に近接し、ヘレニズム的な風潮の影響を多分に受けていた都市であつた。ペテロの弟アンデレ、また同郷人で彼ら兄弟と共にイエスの弟子となつたピリポ（ヨハネ福音書一四四）はともにギリシヤ名であること、ペテロも本名がシモンとなつてゐるが、これもヘブル名のシメオン（<sup>五</sup>シモン）がギリシヤ化したものであること、彼らがギリシヤ人たちと直接交渉の衝にあつた事実（ヨハネ福音書一二二〇—一二二二）、斯うした記録が散見するのもデカポリスに接するベツサイダが彼らの生れ故郷であつたからである。

「ベツサイダ」とは「魚の家」あるいは「魚の町」ということで、その名称が示すように漁業の盛んな都市であつ

た、共観福音書の誌すところ（マタイ四二<sup>三</sup>—四、マルコ一<sup>六</sup>—九、ルカ四三—五二）によればペテロが弟アンデレと共にイエスの弟子となった時には、ペテロはカペナウムに家をもち其処の住民となっているが、漁撈を業としていた者であったということは、彼の出身地と思い合せて、生れながらにして、その技術を身につけた者であったことが肯かれ、またイエスが『人間をとる漁師にしてあげよう』といわれたことにも、皮肉でなく、イエスの透徹した叡知のひらめきを見せるのである。

なお史家ヨセフスの伝えるところに拠れば、時の領主ピリポ（BC四—AD三四年）が「ベツサイダ」をローマ皇帝アウグストの皇女ユリアスの名譽のために記念して「ユリアス」と改称していた（祖先史<sup>二</sup>四<sup>二</sup>—二）。故にガリラヤ湖西岸のベツサイダと区別するためベツサイダユリアスともいわれた。

## 二

『人間をとる漁師にしてあげよう』、『今からあなたは人間をとる漁師になるのだ』とイエスにいわれて、ペテロは『一切を捨てて』（マルコ一〇<sup>三</sup>—八、マタイ一<sup>九</sup>—二<sup>五</sup>）彼に従う生活に更生したのである。だが彼は生れつき衝動的で粗忽者であったため屢々失敗を繰り返えし、生れ更<sup>かわ</sup>りの生活の不徹底さ、それについての疑惑を第三者に懐かしめるのである。

イエスがガリラヤの湖上を歩いたものを見ては『主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください』と願ひ、イエスが招きたもうたので、直ちに舟からおりてイエスに向って水上を歩み出したまではよかったが、風と波におじけを感じ、おぼれかけて『主よ、お助けください』と叫び、イエスのみ手にすがりつき『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったか』とお叱りを受けている。（マタイ一四<sup>二</sup>—三参照）

『あなたこそキリストです』とピリポ・カイザリヤにおける有名な信仰告白をした直後、イエスがご受難について

語り給うのを聞いては、そのようなことは有り得べからざることだとイエスをいさめて『サタンよ、引きさがれ』と厳しく叱られている。(マタイ一六三三、マルコ八三三参照)

ヨハネ、ヤコブとともにイエスに伴われて高い山に登った時、そのみ姿が変りモーセとエリヤが現われるという光景を見ては、自分でも「何をいってよいか、わからないで」山頂に『小屋を三つ建てましょう』と提案している(マルコ九二六、マタイ一七二四、ルカ九二八参照)

ヨハネによる福音書第十三章によれば、イエスは弟子たちと最後の晩餐のため食卓に着くに当って、弟子たちの足を洗われた。やがてペテロの番になった時、彼は恐縮して一旦はそれを拒否に出たが、主が若し洗足しないならば『あなたはわたしとなんの係わりもなくなる』と聞かされ、大狼狽して『主よ、では、足だけではなく、手も頭も』と申出、洗うのは足だけで『ほかは洗う必要がない』と再度たしなめられている(四一〇節参照)

イエスが議会会人の下役、ローマの兵卒ともに捕えられた時、彼は泰然と彼らに応待して居られるのに、ペテロは剣を振って大祭司の僕の耳を切り落すという周章ぶりを発揮している(ヨハネ一八二〇参照)

ペテロが生れつき衝動的で激動し易い感情家であったことを最もよく表わしている例として誰れにでもよく知られている話は、イエスから注意されていたにも係らず、大祭司の中庭で彼が三度びまでも主を知らずと、素知らぬ顔でいいはり通うそうとするとその一瞬、暁を告げる鶏鳴に、門外に出て泣いたという物語であらう(マタイ二六五八、七五、マルコ一四五四、七二、ルカ二二五四、一六二、ヨハネ一八二五、二七参照)

性格的な欠陥から、続けて三度までも、主を否むようなことをしたが、ペテロはイエスから『恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ』(ルカ五二〇)との仰せを受けた時キリストの有<sup>もの</sup>として生れ更<sup>か</sup>えられていたのである。故に『たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません』(マルコ一四三九)といいきり『主よ、わたしは獄にでも、死にいたるまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です』(ルカ二二三)と更生の人としての決

意を表明しているのである。だが、如何とも為し難い人間的な弱さがあつたのである。イエスは、そのことを予ねてから熟知しておられたのである。だから、

『シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい』（ルカ二二・三二—三三）

と彼のために普段の祈りをつづけられたのである。のみならず、深い師弟愛のあふるる激励をさえ吝み給わなかったのである。

斯うしたイエス、ペテロの主従関係に照して、福音書の著者たちがイエスの弟子リストを挙げるに当ってペテロを筆頭においている、また宜べなりと肯かしめられるのである。（マルコ三・六、マタイ一〇・二、ルカ六・一四、使徒一一・三参照）

### 三

ペテロは使徒リストの筆頭に福音書著者等が揃って置いている丈けでなく、彼のことを引合いに出す場合、彼等のスポークスマンとして扱われている。『ごらんなさい、わたしたちはいっさいをすてて、あなたに従って参りました。』（マルコ一〇・三六、マタイ一九・二七）をはじめ『主よ、わたしたちは、だれのところに行きましよう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。』（ヨハネ六・六八）『あなたこそキリストです。』（マルコ八・二九）等イエスに対する弟子たちの主従関係における総意的心構えの表白、イエスの譬話（口にはいるものと口から出るもの）の譬マタイ一五・一五。忠僕の内方についての譬ルカ二二・四一）についての説明を求めている発言、あるいは、世の終りの前兆とそれに対処するための心得について（マルコ一三・三六）の代表的質問の提出、またイエスの御言に対する詰問的発言（ルカ八・四五）やイエスに注意を促す発言（マルコ一一・二）において弟子たちを代表して発言している。

以上の場合のように彼らのサークル間でのスポークスマンとして取扱われていたのみならず、サークル外の者からもそのように見られていたようである。マタイによる福音書第十七章二十四節以下によると「宮の納入金を集める人たちがペテロのところに来て」「イエスの納入金について督促していることが記されている。自分に対して罪を犯した者を赦すことについての質問（マタイ一八三）のように全く個人的なものと見えるイエスとの談話も勿論屢々交わされたことであろうが、多くの場合ペテロは弟子たちを代表してのスポークスマンとして矢面に立たされている。このことは彼がイエスとの最もよき話相手であり、最も親しく心を啓いて話合った間柄であったことを証するものである。

よき話相手で常に親しく話合う間柄であるということは相互によき理解があり相互の信頼があるということである。故にペテロは弟子中で最もよくイエスを理解し全霊を献げて全幅の信頼をしていたものであり、又イエスからは表裡なく悉くが理解され、その上での親任をうけていたもので、その彼に対する信頼と期待とは実に確乎不拔のものであったといえる。そうした両者の理解と信頼とを、ヨハネによる福音書第二十一章十五節—十九節の物語は問答態を以て裏付していると受けとれるのである。

#### 四

キリスト・イエス復活の事実を最初に体験したもの——キリスト復活の信仰を最初に把握したもの——活けるキリストと常に偕なる生活、キリストとの普段の靈交を最初に経験した者は、それについての最古の記録であるパウロの手記（コリント第一、一五章）によっても、福音書の伝えるところ（ルカ二四章）によっても、ペテロであった。

人が人を理解し信頼するということは、決して、その顔かたち、頭髮皮膚の色あい、体軀の大小を知ることではない。その者の思想・感情・意志・精神・才能など目では識別することのできない、寧ろ耳によって解明

されるところによるのである。前節で論じたように、イエス・ペテロの關係は言葉を交わすことによって深められ、互に理解と信頼とを高め、その度合を上げていったのである。しかも以心伝心ということもあるように、時には声を超えて相互に通じ合うものがあって、言外において、その度合を益々助長するものはたらきがあったのである。そうした通じ合いには、肉体的条件の壁をうち破って相はたらき合う力——靈交——もあったのである。ペテロが復活のイエスに相まみえた最初の人間であったということには、生前のイエスと彼が弟子たちの中でも最も多く屢々言葉を交えて相知り合う關係にあったということがあったから、ということではできないであらうか。

『……………あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう……………』(マタイ一六一八—一九)はカトリック教会がこのイエスのペテロへの御言をそのまま伝承しているものとして教會的權威の根拠としている聖句であるが、メンソン(T. W. Manson)は、ペテロの上に教会を建てるとしたのは、ペテロがイエス復活についての最初の証人であるという事実の上に教会を建てることであると解している。理由として①ペテロが最初のイエス復活についての証人であるということは、キリスト教会の最初の会員であること、②ペテロが最初にイエスは甦って神の右の座につきしめられ、主またキリストとなりたもうた方であるとの事実を証した者であること、③ペテロがイエスは神のみ力を以て死から甦えされたことによって『神の子』となられた方であることを表白した最初のものであること、を挙げている。そして『黄泉の力もそれに打ち勝つことはない』という句を説明することができ、ここにこそ死に打ち勝ちたまえる「メシヤの教会」の礎石があると説いている。(The Sayings of Jesus PP. 201—205 参照)

右メンソンが指摘するように、ペテロが最初に体験したイエス復活の事実を証しすることがキリスト教会の礎石であり、それを土台としてメシヤの教会のすべてが築かれねばならない。が、イエス復活の証左は、また「使徒」のなすべき第一要件であったことを聖書は明かにしている(使徒一三三、ルカ二四四六—八、使徒十四一、九二参照)。

先きに述べたように使徒リストにおいて、ペテロが何時もその筆頭におかれているが、その理由の一には彼が最初のイエス復活信仰を確信した者であったという一事をも加えて数うべきであろう。

## 五

イエス御在世の当時からペテロが弟子たちのサークルにおけるスポークスマンとして代表的発言をしていたことについて、三、のところで述べたが、イエスが昇天後エルサレムにおける弟子達の新しくイエスをキリストとする福音宣教の運動が開始せられるようになると、イエスを『主またキリスト』とする信仰を彼の復活の事実において最初に確信したペテロが当然の如く、その運動の指導者またスポークスマンとして表面に出ることになった。即ち

一、イスカリオテのユダの補缺選挙に関する全体弟子会議において（使徒二・一五以下）

二、ペンテコステにおける大伝道集会において（同、二・四一—四六、及び二・三八—四〇）

三、「ソロモンの廊」における大衆伝道において（同、三・二以下）

四、議<sup>サシヘドリ</sup>会における裁判において（同、四・八—二二、五・二九—三三）

五、アナニヤとサッピラの不正糾弾において（同、五・一二—一〇）

六、魔術師シモンの野望是正において（同、八・一八—二四）

以上は使徒行伝の初期弟子たち活動の記録に拾ったものであるが、パウロのガラテヤ人へ送った手紙において、彼が入信後初めてエルサレムに上ったことを書いているが、矢張りその時パウロはペテロをキリスト教会の代表者また指導者であると認めて訪問している様子が窺われる（一・一八）。また、同じ手紙において、ペテロが主の兄弟ヤコブやヨハネと共にエルサレム教会において『柱として重じられていた』ともいっている（二・九）。見方によっては、此の手紙ではパウロはペテロよりも彼の方が優位に在ることを誇示しようと言えしていると見える（二・二一参照）にも拘らず、



原始教会においてはペテロが指導者であり代表者であったことを認めているのである。

昔<sup>(七)</sup>予言者アモスは『わたしは予言者でもなく、また予言者の子でもない』牧者であり、いちぢく桑の木を作る者である(アモス七<sup>(四)</sup>)とベテルの祭司アマジャに答えているが、ペテロも亦職業宗教家の律法学者や祭司ではなく『無学な、ただの人』である。『主はこういわれる』(アモス一<sup>(三)</sup>以下参照)とアモスが繰り返しているように神のみ声をきいては予言者としての南方ユダのテコアから立って北方イスラエルのベテルに赴かざるを得なかったのである。アム・ハーアレッツのペテロも復活のキリストを体験しては『人をとる漁師』として大胆の証人として立たざるを得なかったのである。

## (下)

シモン・ペテロが主イエスから『人間をとる漁師』として召されて『十二人』の一人となつてからは、彼が彼等のスポークスマンであり、キリスト復活の後には、彼が原始教会の指導者であり、代表的存在であったことを上において論述したのであるが、下においては、その後の彼の動静について観察検討して『無学な、ただの人』が世界を教区とする大使徒ペテロとして活躍する面目を偲びたいのである。

## 一

『ペテロは手を振って彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さった次第を説明し「このことを、ヤコブやほかの兄弟たちに伝えて下さい」と云い残して、どこかほかの所へ出て行つた』(使徒行伝一二<sup>(七)</sup>)

これはペテロがヘロデ・アグリッパ王の野心により捕えられ嚴重に牢獄に鎖がれていたが主の御使によって夜陰に

助出され、信者たちの集っている家の戸口に現れたので、驚きと喜びに騒ぎ立とうとする彼らを制して「どこかほかの所へ出て行った」ことを伝えている記録である。

「どこかほかの所へ」(εἰς ἕτερον τόπον 「別の場所へ」 「他の家へ」 「他の町へ」 とも読める)とは何処へ行つたのであろうか。この脱獄したペテロの行き先は聖書記事における謎の一つである。カトリック教会ではローマへ伝道に出ていったのであると解釈している。そして、それがカトリック教会の定説となっている。ガラテヤ人への手紙第二章十一節のパウロの記載からアンテオケ(シリア)にいったのであろうとの説をなす者もあり、またコリント人への第一の手紙の記事(一二、九五参照)からコリント説をなす者もある。

ヘロデ・アグリッパが全パレスチナをその支配下に入れたのは紀元四一年であり、彼が不慮の頓死をした(使徒行伝一二、二三)のは四四年の春である。彼がユダヤ人の歓心を得たいためにペテロを捕えたのは、死の直前か早くて四三年夏頃のことであつたろうと考えられる。アンテオケにおけるパウロのペテロ面罵事件は、その内容から見てもエルサレム使徒会議(使徒行伝一五章一二九)(紀元四六年)以後とすべきであり、ペテロのコリント訪問についても使徒行伝第十八章第一節(紀元四九―五〇年)以前とは考えられない(後段で詳論する)。この時期におけるペテロのローマ訪問に至っては何等根拠とすべき証左がない。ペテロがローマにおいて所謂「ペテロの第一の手紙」を書いたとしても(五三参照)それは紀元六三乃至六四年のことである。では『ほかのところへ』とはペテロは何処へ出て行ったというのであろうか。

恩師フォークス・ジャクソン(F. J. Foakes Jackson)先生はキルソップ・レーク博士(Kirsopp Lake)と共著の *The Beginnings of Christianity* (vol. II. pp. 156—7, vol. IV. p. 138) においてヘロデ・アグリッパ一世のペテロ投獄、主のみ使による彼の脱獄、そしてエルサレム退出の記事は、使徒行伝第九章三三節前に入れらるべきものとしている。即ちペテロがルダ、ヨッパ、カイザリヤ等を巡歴伝道している間に、アグリッパ王の死(使徒行伝一二、三三、紀

元四四年)、クラウデオ帝の時に起った飢饉(使徒行伝一一三八、紀元四六年)、その飢饉救援義金を携えてバルナバ、パウロのエルサレム上京(使徒行伝一一三九、一四〇)と事件がつづき使徒會議の開催(使徒行伝一五一、一五二)となる。そして、その會議にはペテロも帰京して之に列席し異邦人伝道の経験から發言するという場面に逢着する。このように解釈するのである。ペテロが、エルサレムを退出してから會議までの約二ケ年の歲月、それは、ルダ、ヨッパ、カイザリヤ等を彼が巡歴して福音宣教に活躍した期間と匹敵するものと考えて少しも不自然でなく納得のできる長さである。

## 二

当時のユダヤ人社会において『ヘブル語を使うユダヤ人』と『ギリシヤ語を使うユダヤ人』との二階層(使徒行伝六二)があつて、單なる日用語の相違、保守、進歩、あるいは、国粹的、國際的生活様式の違ひということだけでなく、思想・行動悉くにおいて一致し難いものがあつて、個人的利害を外にしては、互に相容れず、相反目していたやうである。そのことが、既に『信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと言張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた』(使徒行伝四三三)といわれてた原始時代のキリスト教会内においてさえ問題となつたのである。

使徒行伝第六章五節には、そうした紛争を排除する目的で『信仰と聖靈とに満ちた人ステパノ』以下異邦人『アントオケの改宗者ニコラオ』に至るまでの「七名」が挙げられたことが誌されている。『ヘブル語を使うユダヤ人』と『ギリシヤ語を使うユダヤ人』との反目を治めるため、公平な配給係として選ばれた筈の彼らであるが、そのために彼らの執り行つた職務については聖書は何も語らず、ステパノやピリポについては彼らが伝道者であつた事実を伝えているのである(使徒行伝六八、四〇)。斯うした事例に基き、またギリシヤ名の者のみであるところから、この「七名」は『ギリシヤ語を使うユダヤ人』の間において使徒的使命を果たすために選任されたものであつたとも受けとれるの

である。

ステパノ事件によって捲き起された反イエス・キリスト運動は『ギリシヤ語を使うユダヤ人』階層での出来ごとであるが、既にその時にはサウロを初め、その階層でのユダヤ教の正統派的立場にある者に恐怖と憂慮を懷かしめるに充分なキリスト教伝道の成果を、かの『七名』を中心に挙げていたことを思わしめるのである。しかも彼らはエルサレムを追われて散っていったのであるが、その行く先きざきにおいて『ギリシヤ語を使う人々』を相手に『御言を宣べ伝える』ことを続けたのである。（使徒行伝八<sup>四</sup>）。

性格的な欠陥、人間的な弱さをもっているペテロに対して『わたしは、あなたの信仰がなくならないようにあなたのために祈った』（ルカ二<sup>三二</sup>）と仰せになった主イエスの深い師弟愛に活かされ、自分に対して罪を犯した者をゆるすに『七たびを七十倍するまでにしなさい』（マタイ一八<sup>三</sup>）という寛大さを身を以て学んだペテロは、彼等の伝道の結果『サマリヤの人々が神の言を受け入れた』（使徒行伝八<sup>一四</sup>）との報を聞いては、サマリヤ人といえばエルサレムのユダヤ人とは常にいがみ合い憎しみあっている間柄であるにも拘わらず、直ちに旅装をととなえて、彼らと『信徒の交わり』（使徒行伝二<sup>四二</sup>）をするため、エルサレム教会を代表して出掛けたのである。（使徒行伝八<sup>一四</sup>以下）<sup>九</sup>

このペテロのサマリヤ訪問出発に際して、彼はエルサレム教会における主権、その監督指導の権を主の兄弟ヤコブに委譲したもののようである。故に使徒行伝一二<sup>一七</sup>のペテロの離京に際しての伝言も『このことを、ヤコブやほかの兄弟たちに伝えて下さい』となっているのであろう。又、使徒会議におけるエルサレム教会を代表しての発言がヤコブとなっている（使徒行伝一五<sup>二三</sup>）のも、そのためであらう。パウロが最後にエルサレム訪問をした時に、帰京の挨拶をしにヤコブを訪ねている（使徒行伝二二<sup>八</sup>）のも、そのためであらう。

サマリヤ訪問を転機としてペテロは爾後全教会（ヘブル語を使うユダヤ人の教会、ギリシヤ語を使うユダヤ人の教会、異邦人をも会員とする教会）の和親一致のため挺身活躍する牧者となったのである。

パウロの「ガラテヤ人への手紙」第二章には『ケパがアンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあったので、わたしは面とむかつて彼をなじった』(十一節)という書き出しで、エルサレムからユダヤ教の風習を固守しているクリスチャンが到着するまでは、ペテロが自由に異邦人とも食事をともにしていたのに、彼らが来てからは、その目を恐れて次第に身をひき、遂には中止して仕舞ったことを指摘して、彼の行動は偽善であり、その生活態度は不徹底であると面罵したことが伝えられている。<sup>(註)</sup>

このペテロのアンテオケ訪問については、斯うしてパウロの手記にあるだけであって、使徒行伝には平行記録はもとよりその片鱗さえも窺われないのである。従って何時頃のことであったか、それを決定すべき確かな資料となるものは見出せないのであるが、エルサレムにおける使徒会議の直後ではないかと考えられるのである。そもそも使徒会議は『ギリシヤ語を使うユダヤ人』クリスチャンの伝道によって多くの異邦人クリスチャンを迎えることになったアンテオケの教会において彼等異邦人クリスチャンにもユダヤ教の慣例に従って『割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである』(使徒行伝一五<sup>五</sup>)か否かが問題となったので、パウロ、バルナバ等が上京の機会に使徒・長老等にそれを訴えたことに端を発して開かれた会議であった。その決議は文書に綴られ、ユダとシラスの両名に托され、二人の使者はパウロ等と共にアンテオケに下ったのであった(使徒行伝一五三<sup>一三</sup>)。

ユダとシラスという公けの使者がアンテオケに派遣されたものの、<sup>(註)</sup>廻りの主に『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか』と三度も念を押され、『わたしの羊を養いなさい』と繰り返し繰り返し三度までも命ぜられている(ヨハネ福音書二一<sup>一五以下</sup>)。ペテロとしては、主の小羊として彼らを養う責任のあることを覚えて、使者たちの後を追うてアンテオケに下っていったものと思われる。そして異邦人クリスチャンとも『信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈

りをしていた』(使徒行伝二<sup>四三</sup>)のである。これに対して後から来たユダヤ教的風習のしがらみから脱し切れないエルサレムの教会員等は批判的態度に出たので、ペテロは所謂罪ある人、税吏、遊女、等と食を共にして非難された主イエスを偲びつつ、静かにユダヤ教的クリスチャンには反省を促すような態度で逆ろうことなく、しかも異邦人には彼らの氣持を傷けないように同席することを遠慮したのであろう。何等の弁明も弁解もせずにパウロの前を去り行くペテロに、嘗ての激情家ペテロが復活のイエスによって教えられた忍耐と寛大に堅く立って、全教会の牧者としての貫録を示しているのを見るのである。

#### 四

使徒行伝第十二章七節の『どこかほかの所へ出て行った』の項でペテロはその時コリントへ行ったのだという説があることを紹介したが、パウロが書いたコリント人への手紙の内容から見て、ペテロは同地を訪問したことがあったと思わしめるに足る程、コリント教会員がペテロを知り、尊敬していることが窺知される。但しペテロのコリント訪問は同地の教会がパウロによって設立された後である。なぜかならば、パウロは自ら他人の据えた土台の上に教会は立てぬ、『キリストの御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えること』を以て、彼の伝道戦線における一貫した方針であることを「ローマ人への手紙」(一五<sup>一九以下</sup>) (紀元五五年)で告白していることから自明である。

パウロの多くの書簡中「ケパ」<sup>(+三)</sup>の名を以てペテロのことを終始引合いに出している書は「コリント人への第一の手紙」の外にはない。しかもその場合いつもコリント教会員がペテロを知っているというばかりでなく彼を尊敬している使徒として遇していることを前提としている。(一二<sup>二三、三三</sup>、九五、一五五) 一二及び三三によりペテロに敬意を払い私淑しているコリント教会員が相当にあったことを裏書きされるのである。九五の記載に至っては目のあたりにペテロの行動を見たものでなくては解らないことである。故にペテロがコリント教会を訪れたことがあるということは確

かである。

「ガラテヤ人への手紙」(二七)によれば、ペテロは『割礼の者への福音をゆだねられている』者、パウロは『無割礼の者への福音をゆだねられている』者と定められていた様に誌されている。しかし、これはパウロが本書を認めた時の筆の勢いに任せての文であつて、<sup>あや</sup>実際にはそのような協定も決議もあつた訳ではない。ただ此処でパウロは彼の異邦人伝道の使命觀と信念を現わしているに過ぎないのである。

それはそれとして、ペテロには前項にも述べたように、主の小羊すべてを養うべき責任の自覺があつた。そこで、ルダ、ヨッパ、カイザリヤの伝道にも赴けば、異邦人を交えたアンテオケの教会へも『交わりの手を差し伸べた』(ガラテヤ二九)のであつた。

アンテオケにおいてはパウロとの間に聊か気まずい思いをさせられることも起つたが、これとても、その時のゆきばかり上の出来ごとであつたし、ペテロ自身としては何時もパウロの立場に対して同情的であり、進んで協力を惜しまなかつたのである。例えば、使徒會議におけるペテロの發言(使徒行伝一五一一)を見よ。そこで、アンテオケにおけるパウロの面責というようなことのあつた後ではあつたが、パウロのギリシヤ人伝道、殊に一年半以上にわたる伝道の労苦とその成果を聞いては、コリントがアジアとヨーロッパを結ぶ重要都市であり、エルサレム、アンテオケに比して優るとも劣らない教会の拠点たるべきを考えて、これを訪ねたのである。恐らくアポロと相前後してコリントに來たのであらう。

## 五

『ペテロの第一の手紙』は『ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジアおよびビテニヤに離散し寄留している人たち』へ使徒ペテロから送られた手紙となつてゐる(一一)。このうちポント、カパドキヤ、アジアの地方名はペンテコステ

の日にエルサレムへ上京していた人々の故郷名にあげられているものである（使徒行伝二九）。故にそうした人々によって福音が伝えられていたこともあつたろうし、又「ローマ人への手紙」第十六章に挙げられているアンデロニコとユニアス（七節）あるいはウルバノ（九節）のような「ギリシヤ語を使う」伝道者（Hellenist-missionaries）によって宣教事業がなされたでもあろう。いずれにしても、これらの地方はシリヤのアンテオケからキリキヤ州を経て達することのできる地方である。ポント、ビテニヤ、アジヤ諸州の沿岸都市には多くのユダヤ人が植民していたところとであるが、就中ポント州のアミサス港は黒海沿岸のこの地方で最初に基督教を受容れた町といわれている。<sup>(十三)</sup> 使徒行伝第十六章六節以下において、パウロが『アジヤで御言葉を語することを聖霊に禁ぜられ』また『ビテニヤに進んで行く』としたが、イエスの御霊がこれを許さなかった』ということ伝えてあるが、勿論、当時の彼の健康状態がそれを阻んでいたことも考えられないでもないが、既に、これらの地方が福音宣教の伝道戦線に入っており開拓伝道の緒についていたからということが、彼をして躊躇せしめた最大の原因であつたろう（前掲ローマ書一五二〇参照）。

世界はわが教区である——すべての主の羊群を養う責任が自分に負わされているのである——との自覚をもっているペテロは、シリヤのアンテオケからエルサレムには帰らず、路をキリキヤから、ガラテヤ、ポント、ビテニヤ、アジヤへと取って、コリントへ出たのではないかと思う。

〔使徒會議以後ペテロの姿はエルサレムには現われない。パウロのエルサレムに最後の上京をした時にもヤコブとは会っている（前掲）が、ペテロについては何も言及されていない。〕

このようにして、無名の開拓伝道者の働きによって立てられた教会を瀝訪してペテロは、強固なる土台の上に教会を据え、彼等のために天国の門を開いて御国の幸福を彼らに示し（マタイ一六八、一九参照）、主にある喜びとまごころの（*ἐν ἀγαλλίασει καὶ ἀφελότητι καρδίας*）<sup>(十四)</sup> 交わりに入らしめたのである。

斯うして「無学な、ただの人」ペテロは世界をその教区とする大牧者大使徒となつて、南船北馬して主の羊群を養



う責任を果していったのである。幸にして当時の旅をするに充分な陸路海路の便は発達していたし、また何処にいても通ずる国際語グreek・コイネがあつて福音宣教に不自由しなかつたのである。

## 六

ガリラヤの漁夫の出身であるペテロにそんな語学の素養があつたろうか何うかを疑うものもあるであらう。尤もなことである。語学としての正規の教育については欠けるところがあつたであらう。しかし、日常の会話はもとより一通りの話をするには不自由なく、彼はコイネを語ることができる環境に成長したのであつた。彼の生れ故郷ベツサイダ・ユリアスはピリポ（ヘルカ三参照）が再建してその首都と定めたところであり、北方のピリポ・カイザリヤと共に、最もユダヤ的なものが稀薄でヘレニズム的なものが横溢していた町であつた。加之、ベツサイダは、ヘレナイゼーションの先き手を使命として建設されたデカポリスとその東が隣接しているのである。ペテロはそのベツサイダ・ユリアスで成人したのであつた。

イエスの奇蹟に五千人の群集を少年の携えていた五つのパンと二つの魚を以て養ひ給う話があるが、魚はパレスチナの一般庶民の食卓に供される常食であつた。殊にガリラヤ湖は常に新しい清水を受け入れては、これをまたヨルダン河に送り出すようになっていたので、何時も美しい水をたたえ魚類の棲息に適し、その上、気温が漁業に適しているので、イエスの時代の重要産業資源となつていた。捕れた魚は管にパレスチナ内の需要を充たしたのみならず、醋漬または塩漬にして、南はアレキサンドリヤ、北はアンテオケ、更に遠くはローマにまでも輸出して、グレコ・ローマ時代の諸都市住民の食卓をにぎわしていたといふことである。<sup>（二六）</sup>ゼベダイが二人の働き盛りの息子等が網と船を棄ててイエスの弟子となつても（マルコ二九以下）少しも苦にしまつたといふのも、ガリラヤ湖の漁業の盛大さを思わせる物語である。ペテロがイエスに召しを受けたときにはカペナウムに住み、妻もあつて漁夫として弟アンデレと共に

に家業に励んでいた時である。故にそれまでに、彼自らが直接異邦人（ギリシヤ人）との商取引きにも当り折衝もしたことであろう。殊にベツサイダ・ユリアスの出身であるということは、自ら、彼をそうに駆っていったことでもあろう。

斯うして、異邦人と交る上においても言語上のハンディキャップがなかったということが、ペテロをして長くエルサレムに留まっていることをゆるさず、異邦人をも会員とするアンテオ教会へ、あるいは、コリント教会へ敢て足を延ばさしめ、カパドキヤ、ポント、ビテニヤ、アジヤ諸州の教会へも使命——『主の羊』を牧する——ただ一筋に臆することなく足を運ばさしめたのである。

## 【註】

### (一) 「議會」(τὸ συνέδριον)

ローマ帝国政府は領内の治安維持を、自治的に、その領地主着の民族に任せる政策をとった。ユダヤ人の間には宗教的律法下に、そうした機関があった。それが新約聖書中に「議會」と訳されているものである。「議會」の構成は祭司系のサドカイ派と、律法学者系のパリサイ派、各三五名に、議長格の祭司長（大祭司）からなっていた。

### (二) アム・ハーアレツツ（アンメ・ハーアレツツ） יִשְׂרָאֵל דָּבָר

アム・ハーアレツツとは「土の人」ということであって、ユダヤ教的教養のない者のことをいふ。(C. G. Montefiore: Rabbinic Literature and Gospel Teaching, pp. 3—5 参照)

### (三) ガリラヤ的特色

ガリラヤ人の発音には、南方のもの殊に首都エルサレムの者と異なるものがあつた。(マルコ一四七Q、マタイ二六七三参照)

### (四) デカポリス地方

Decapolis とは、ギリシヤ語で「十の都市」の意で、即ち「十のギリシヤ人都市ある地方」ということである。その十の都市は、

Scythopolis, Canatha, Raphana, Dion, Hippos, Abila, Gadara, Pella, Garasa, Philadelphia である。このうちスクトポリスはセム語地名の Beth-Shan- フィラデルフィアは Rabbah が改名されたところである。

(四) シメオン

シモン・ペテロのシモンがシメオンの転化であることは、使徒会議において保守的でユダヤ的である「主の兄弟ヤコブ」がペテロの発言を指して『シメオンがすでに説明した』（使徒行伝一五<sup>四</sup>）といっていることで明かである。（『ペテロ一』では『シメオン・ペテロ』となっている。）

(五) この場合はペテロのみでなく、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが同席して、イエスに『ひそかにお尋ねした』ことになっているが、彼らが弟子たちの代表者としての質問である。そしておそらくペテロが発言者であったと見てよからう。

(六) 預言者アモス

預言者アモスは、自分の預言の言葉を手記して残した最初の預言者である。彼は紀元前七世紀南方ユダ国のテコア（エルサレムの南方でベツレヘムが丁度両者の中央に位する）で牧畜と農業を本職としていた者であった。脚の短い羊を養い、いちぢく桑を作っていた。そして、それらを売捌くために北方はダマスコまでも旅行し、その間に、預言者としての召命を受け、北方イスラエルの現状を憂い、彼らの大祭日に、その祭り場に現われて、しかも挽歌調であるキーナー調を以て彼の預言を告げたのである。ベテル (Beth-El 神の家) の祭司アマジャが怒ったのは無理からぬことでもあったろう（七一〇二三参照）

(七) ヘロデ・アグリッパ王の頓死

使徒行伝では『虫にかまれて息が絶えてしまった』（一二<sup>三</sup>）となっているが、ユダヤ人の史家フラビウス・ヨセフスの伝える処によれば、祭りの二日目の朝、王が白銀の王衣をまとうて現われ、民衆の歓呼を迎えられ得意の絶頂にあった時、彼はこともあろうに凶報の使者とされている梟が彼の頭に捲き付けている紐に飛んできてとまるのを見たのである。スルト王は息が絶えたとなつてゐる。（ユダヤ人の祖先史ⅩⅩ・八三）。いずれにせよアグリッパ一世（ヘロデ大王の孫）の最期は怪死であったのであろう。

(八) 『ペテロとヨハネ』

使徒行伝八<sup>一四</sup>以下のみならず、使徒行伝においては、影の形に添うようにペテロの行動記事にヨハネの名が附随している。しかし、ヨハネは何も言動することなく名のみが併記されているのである（三<sup>一三</sup>、四<sup>一一</sup>、四<sup>一三</sup>、九<sup>八</sup>、一<sup>四</sup>）。そこで、これらのペテロに関する資料がエルサレムから得たものであるとの「しるし」にルカがJeあるいはJcと付していたのをヨハネが同行したことを示すため誌したものと誤読され筆写された結果と解釈することができる（Fokes Jackson and Kirsopp Lake: *The Beginnings of Christianity*, vol. II, p. 140. 参照）。

しかし、このペテロのサマリヤ行に同行していったのは使徒ヨハネでなくヨハネ・マルコであったろうとの説をする者もあるが、現存ギリシャ語新約聖書写本の断片 H.L.P.S.s（いずれも八、九世紀の物であるが）には、此の使徒行伝八<sup>一四</sup>には *for Peter* とあってヨハネの名がない。故に少くともサマリヤが福音を受け容れたとの報を聞いてエルサレム教会から代表として下っていったのはペテロのみであったとするのが至当である。

(H) アンテオケにおけるパウロのペテロ面罵事件

パウロがペテロを面責面罵したということはユダヤ教的基督教の敗北であり、世界的基督教の確立途上における基督教会の発展的アウヘーベンでやむを得なかった事件であったともされるが、ペテロの権威を継承するとの信仰に立つローマ・カトリック教会にとっては、最初から悩みの種子となっていた事件であった。そうした歴史について簡単ではあるが要領よく示して呉れるのはライトフットの『ガラテヤ書講解』(J. B. Lightfoot: *Galatians*, pp. 127—131) である。彼は (1) ペテロの性格から論じての説明からはじめて、(2) この事件が教父時代から異端者及び異教徒の基督教攻撃の材料に使われたこと、(3) アレキサンドリヤのクレメントの説——この「ケパ」は使徒でなく同名の「七十人弟子」の一人であったこと、(4) オリゲンの説——偽装説ともいふべき議論で、パウロがペテロより優越しているらしく見せかけたのにすぎないこと、(5) オーガスチンの批判、聖書の権威から聖書に誌されている通りに解すべきことであるとして、偽装説を執って来た教会の主張（ジェロームを相手として）を攻撃して正統的な見解を確立した。(6) かくして近代に至るまでの一般見解としては、ペテロの謙讓の美德を示す行為(a noble example of humility)とされていると結んでいる。

(出) 『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか』

イエスはペテロに *dyetās me* と問うているのに対して、ペテロは *phāwōe* と答えている。二度まで同じ問答が繰返されている。しかし三度目には主 *phāwōs me* と仰せになっている。アガバイもフィラインも本来的には相違はない精神的な愛を表わす語である。しかし両者を比較するとフィラインは Kiss の人間的行為感情を伴う場合がある。精神的な愛といながらもそれだけ具体的身体的な行為行動が前提されている。それだけのペテロの献身的決意を読み取るべきではなからうか。ICC・Gospel according to St. John, by J. C. Bernard, vol. II. pp. 701—4 参照)

(出) 『ケパ』

『ケパ』 *ḫpā* はアラム語で、ギリシヤ語のペテロ (*πέτρος*) に相当する語である(ヨハネ一四二参照)。パウロはローマ帝国内では常に自分の名をギリシヤ語でいうことにしているが、ペテロに対しては寧ろアラム語を好んで用いている風がある。

(出) W. M. Ramsay: The Church in the Roman Empire before A. D. 170. pp. 10, 225.

(出) 『*ḫpā* と *ḫpāwō*』

この『*ḫpā*』という語は、誠実な心とか真心ではない。英語では屢々 Simple heart, singleness of heart などと訳されている。平坦な心、恬淡な心、わだかまりのない心ということである。

(出) ベツサイダ・ユリアスとピリポ・カイザリヤとがその地方において最もギリシヤ的でユダヤ的なものが稀薄であったことについて The Westminster Historical Atlas of the Bible, p. 75a を見よ。

(出) 魚肉がグレコ・ローマ時代の都市庶民の常用食であったことについては F. C. Grant, The Economic Background of the Gospel, p. 56 を見よ。

## Peter, the Untrained Layman

### Résumé

The Jewish rulers, elders, and doctors of the Torah brought Peter before the court and examined him, but could not find any Jewish religious training and ability in him, and noted that he was only an untrained layman.

While Jesus, incarnated Logos, lived with them, Peter was the spokesman among His disciples and had many chances to talk with Him. That is why they had more accurate understanding each other than any other disciples and their master. Peter confessed to him that "You are the Messiah", and Lord answered that "You are Peter, the Rock: and on this rock I will build My church, and forces of death shall never overpower it."

Peter was the first man to see the risen Christ. Because their communion didn't be broken down by "forces of Death" as Lord promised. Risen Christ commanded to Peter to feed His sheep, who were not meant only Jewish Christians, but Gentile too.

The Christianity combeeyed to Gentile lands through the Hellenist Christians who were scattered on account of the persecution caused by Stephen's activity.

When Peter heard that Samaritans accepted the Christianity, he transfered his episcopacy of Jerusalem Church to James, Lord's brother, and went down there. Hereafter, he freely went to any place, where Christianity was accepted, and performed his duty to feed the sheep of Lord.